

幼児の Narrative Skill 発達につながる Family Narrative の支援に関する研究

Designing the Activity which Supports Family Narrative.

佐藤 朝美* 朝倉 民枝** 椿本 弥生***

Tomomi SATO Tamie ASAKURA Mio TSUBAKIMOTO

東京大学情報学環*

Interfaculty Initiative in Information Studies, the University of Tokyo*

(株)グッド・グリーフ**

Good Grief Inc. **

公立はこだて未来大学 メタ学習センター***

Center for Meta-Learning, Future University Hakodate***

<あらまし>子どもの Narrative Skill の発達には、家族としての Narrative (Family Narrative) が重要であるという。親自身が家族としての経験の意味付けを家族内コミュニケーションにおいて行っていくことが、子どもの Narrative Skill におけるストーリーの意味付けの行為に影響する。本研究では、Family Narrative Consortium が作成した指標とその結果を手がかりに、メディアを活用した家族内コミュニケーションの活動をデザインし、Family Narrative 向上の支援を行う。

<キーワード> Narrative Skill, Family Narrative, 家族内コミュニケーション

1. はじめに

幼児期の子どもは、言葉の発達に伴い、様々な物語(Narrative)ー自分の過去の経験、空想の話、誰かを主人公とした仮想の出来事などーを産出していく(秦野 2001)。特に 5 歳半頃から複数の認知機能の発達に伴い、物語行為が多くみられるようになる(内田 1996)。このような言葉の発達が著しい幼児期には、親しい身近な大人との対話が重要であるという(岡本 2005)。しかし、近年、父親の長時間労働だけでなく、母親の職業進出に伴い、家族内のコミュニケーションは希薄化している(厚生労働省 2004)。さらに、都市化、核家族化及び地域における地縁的なつながりの希薄化等により、家庭の教育力の低下が指摘されるなど、社会全体での家庭教育支援の必要性が高まっている。家庭の教育力の向上支援につなげるべく、言葉の発達に重要な家族内コミュニケーションの機会を充実させていくことが必要である。

2. Family Narrative とは

Narrative Skill とは、いくつかの出来事の一つのストーリーにおいて関係づけ、意味づけてゆくと共に、ストーリー全体をより精緻なものにしていく力である。本研究では、さらに親を加えた

家族としての Narrative (Family Narrative) を支援する。子どもの発達は家族システムに埋め込まれており、子どもの Narrative もまた、家族が日常語り合う Family Narrative に影響される。このような状況を考慮し、Family Narrative Consortium (FNC)は、家族の語りには、1) 一貫性があるか、2) 家族メンバーのインタラクションパターンが偏っていないか、3) 家族の関係性に各メンバーが信頼を持っているか等に関わる指標を作成している(Fiese 1999)。ここでの Family Narrative とは、個人を超えて、家族がどのように世界の意味を生成したり、家族のやり取りについて語ったり、家族というものをどのように受け止めるかについて扱っている。

本研究では、これらの指標と研究結果を手がかりに支援活動のデザインを行う。

3. Family Narrative 支援方法

本研究では、家族としての経験の意味生成を行うために、家族が自分達で家族の物語を作成する活動をデザインする。対象は、家族内コミュニケーションのインタラクションパターンが確立途中にある未就学園児のいる家族とする。

作成する物語は、子どもが成人した時に見せる

という目的とし、ビデオレターの形態で仕上げる。子育ての渦中にあるこの時期に、父と母がどのような思いで子育てをして、将来の子どもにどのような願いを抱いているのか、また、家族というのが自分たちにどんな意味があるのかについて、この瞬間をタイムカプセル化し、未来の子どもへメッセージを残すというものである。

経験を組織化し、意味づける「意味の行為」では、出来事や経験についての語りと意味づけの密接な関係が強調される(Bruner 1999)。そして、困難や危機に直面し、これまで維持してきた自己概念が他者との関わりのなかでもは機能しなくなった際に、人は語りという行為を通して、新たな事象間の結びつけを行い、自らの経験への新たな意味づけを得ようとする。

また、物語によって喚起される感動は、物語の構造によって高まる場合とそうでない場合がある。物語の理解に関する研究において、物語の構造は、物語内容の理解と関係することが示されており、物語を読む際の認知的処理において、事件発生に関する記述とその事件が解決する際の記述は、もっとも重要な要素であることが明らかにされている(内田 1996)。

以上から、未来の受け手である子どもに向けて、感動を喚起する物語を作成するべく、父母がお互いの困難や葛藤を持ち寄り、それらを克服する展開のストーリー展開を吟味していく過程をこの活動の核とする(表 1)。父母の思いが互いに矛盾した問題について、子どもの為の物語作成という動機で、解決策を検討しながら、問題を乗り越え、家族としての1つの家族物語を作成する。その過程で、Family Narrative における FNC の指標 1)-3)の点が向上するよう活動をデザインする。

表 1:家族物語のストーリー構成

シーン	シーンの概要
シーン 1	家族紹介
シーン 2	家族の日常で幸せな瞬間、家族の意味を感じる瞬間のシーン
シーン 3	父母それぞれが感じている困難・葛藤・問題についてのシーン
シーン 4	シーン 3 についてお互いに語り合い、解決方法について検討するシーン
シーン 5	成人した子どもに向けて伝えたい家族からのメッセージ映像

4. ワークファミリーコンフリクト

物語作成活動の核となる困難や葛藤については、ワークファミリーコンフリクト(以下 WFC)を参考に(若島孔文ら 2009)。WFC とは、仕事と家庭を両立しようとする際に生じる葛藤である。職業を持たず、子育てに専念している女性も、様々な葛藤があるという(徳田 2004)。辛く大変だと感じる子育てについて、自己の変化を成長や学びとして意味付ける、あるいは子育て経験から生じる楽しい等の感情によって意味付ける、さらには子育てを自然なもの、生活の一部として意味付ける等、その困難の乗り越え方も様々である。それらの状況を参照し、家族が抱える葛藤・困難・問題について検討してもらおう。

5. 今後の予定

本年度は、家族物語作成の活動デザインを行い、評価実践を行う予定である。提案した活動を通じて、Family Narrative が向上されていく過程について分析していく。

謝辞

本研究は、平成 22 年度科学研究費補助基盤研究(C)(課題番号:22610004、代表:佐藤朝美)の助成を受けている。

参考文献

- Bruner, J. M., 岡本夏木ら訳 (1999) 意味の復権。ミネルヴァ書房、京都
- Fiese, Barbara H.; Sameroff, Arnold J. (1999) The Family Narrative Consortium: A Multidimensional Approach to Narratives. Monographs of the Society for Research in Child Development, v64 n2 pp.1-36
- 秦野悦子 (編集) (2001) ことばの発達入門。大修館書店、東京
- 厚生労働省 平成 16 年度全国家庭児童調査
- 岡本夏木 (2005) 幼児期。岩波新書、東京
- 徳田治子 (2004) ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ：生涯発達の視点から。発達心理学研究, 15(1) pp.13-26
- 内田伸子 (1996) 子どものディスコースの発達。風間書房、東京
- 若島孔文ら (2009) 家族構造とワーク・ファミリー・コンフリクトに関する研究。東北大学大学院教育学研究科研究年報 57(2), pp.165-188